

「夢は牛のお医者さん」(2016/1/25)

昨年、宇多津イオンシネマで「夢は牛のお医者さん」を見てきました。

昭和62年、新潟県の出雲の小学校、新入生がいらないからと、校長先生は新しいクラスメートとして3頭の子牛を入学させます。牛との共同生活、そして迎える牛の卒業式。病気がちな牛たちを前に、少女は思いました。「私がお医者さんになって牛たちの病気を治してあげる」。

この映画の監督時田さんは、テレビ新潟の報道記者として3頭の子牛の入学時の取材で初めてこの少女、知美さんに出会いました。時田さんは素朴な木造校舎となにより素朴でピュアな小さな小学校の9人の子どもたちのファンになりました。牛の卒業式にも立ち会いました。「これまで生きてきて、牛の卒業式での子どもたちの涙、あんなにきれいな涙を見たことがありません。なぜこんなに純粋な子供が育つのか？土地柄なのか？家族なのか？もっと知りたくなりました。しかし、当時間かされていたのは、数年後には廃校になるかも知れない事…。ならば、廃校まで密着していこう！ローカルニュースの継続企画になりましたと、時田さんは言います。

時田さんは、当初は「素朴な学校・ピュアな児童」が取材対象で、特に知美さんだけ焦点を当てることはありませんでした。知美さんの「夢」は知っていました。「牛のお医者さんになりたい」…。でも、獣医者になるには難関大学を出ないといけません。単純に「子供の夢だな」と記憶の片隅に忘れ、廃校後の4年間は会っていませんでした。

ある日、時田さんは知美さんの家に電話してみました。すると、「親元を離れて下宿をし、遠い地元の名門高校に通っている」とのこと。高校入学直後の成績順位が最下位近くだったことにショックを受け、「高校3年間、テレビは見ない」と誓い、猛勉強しているとのこと。過去に聞いた彼女の「夢」を、本気で受け止めずスルーしていたテレビマンとしての自分が恥ずかしかつたと、時田さんは言います。それから「彼女の夢に密着し、見届けること」が時田さんの夢になります。知美さんからの願いはただ一つ「大学に落ちたら放送しないでね…」。

獣医学部の試験は10倍から20倍の難関と言われます。知美さんは、高校卒業間際には学年トップ15に入るほど成績を上げました。大学受験、そして獣医師国家試験合格を取材し、獣医師なったばかりの春に「ズームイン!!SUPER」で放送した時には、16年の歳月が流れていました。「夢をかなえた姿は、自分にも頑張る勇気をくれた」、「もう一度見たい」、「学校で子どもたちに見せたい」など、驚くほど反響がありました。しかし知美さんは、「夢がかなったのではない。ようやく夢のスタートライン立っただけ」と言いました。

夢に続きがありました。ならば、もう少し夢に付き合わせていただきたいと時田さんが思った矢先に起きた(間を開ける)、「東日本大震災」。新潟にも多くの方が避難してきました。そんな家族・そして子どもたちにもう一度、いや、新しい「夢は牛のお医者さん」を見てもらおう。新潟の地方テレビ局が作る番組を、被災地は勿論全国に見てもらうにはテレビではなく映画という手法があります。テレビ新潟内では「無理だ、出来っこない」の意見が当然出ました。

時田さんは、知美さんの生き方を見続け、「はなから諦めるのではなく、挑戦する」ことが大事と教わりました。子育てをしながら獣医師を続ける「今」の知美さんを通し、「夢の続き」だけでなく「家族・故郷・仕事の喜びと現実」を加えた26年間を描こう。誰にも愛されるプロの獣医師になった知美さんの姿…。彼女の生き方が背中を押してくれたから映画は完成した。時田さんは言います。時田さんの新たな夢が実ったのが、映画「夢は牛のお医者さん」でした。

参考文献

パンフレット「夢は牛のお医者さん」

ノブレス・オブリージュ (2016/2/8)

明日は新入生周知会があります。私は、新入生をお迎えする時期が近づくとすることがあります。本校は、希望すれば全員入学できる学校ではありません。試験の点数が良ければ入学できる学校でもありません。皆さんは、皆さんの努力と運と保護者の方々のご協力があり、入学試験を経て、本校在校生として今います。ですから皆さんに胸に留めてほしい言葉があります。それは、ノブレス・オブリージュ(noblesse oblige)です。この言葉は、「恵まれた人間が自覚すべき義務」(田坂広志『未来を拓く君たちへ』,PHP文庫,2009)という意味です。本校に入学したくても、様々な理由で入学が叶わなかった人が多くいます。皆さんは恵まれています。

さて、『茶色の朝』(フランクパヴロフ,大月書店,2003年)という本があります。この本は、すべてが茶色だけになってしまう物語です。ある国では、何もかもが茶色にじょじょに染まっていきます。猫,犬,新聞,ラジオ,本,人々の服装,政党の名前等です。茶色以外の猫や犬,茶色新聞以外の新聞,茶色ラジオ以外のラジオなど茶色以外のものは一切存在が認められなくなります。主人公はじょじょに茶色以外のものが認められなくなっていく中で、考えぬくことをやめ、言い訳を見つけてその情勢に合わせてやりすごそうとしました。そして、最後は……。たぶん、主人公はかつて白と黒のぶちの猫を飼っていたということで捕まえられてしまいます。

『茶色の朝』では、政府批判をしていた「街の日常」という新聞が廃刊させられました。今日は、明治2年(1869)に新聞紙印行条例が出された日です。大政奉還,王政復古,戊辰戦争と続く幕末から明治にかけての動乱の中、国民は政局や戦争に関する情報を求めていました。そこで、明治になると全国各地で新聞が創刊されました。多くは政府派か反政府派の立場で政治的主張を掲げていました。政府は、反政府派の新聞を弾圧する一方、新聞紙印行条例を公布し、正式に新聞の発行を認めました。新しい政治体制や国作りを国民に知らしめるために新聞は不可欠であると認識したためです。こうして創刊された新聞各紙は、それぞれ廃藩置県,議院制度,開化思想等で論陣を張りましたが、政府に都合の悪い主張をする新聞は弾圧されました。

ここで、皆さんの「恵まれた人間が自覚すべき義務」を考えたいと思います。まず、皆さんには、批判的に物事を見る力をつけてほしいです。新年の挨拶で「三猿の教えのようにまっすぐに、素直な心で進む2016年でありたいですね。」と話しました。ですが、素直な心で進むことと、人の言動を鵜呑みにすることとは違います。素直な心で進むとは、曇ってない眼でしっかり物事を見つめ考え抜き進むことです。人の言動を鵜呑みにすることは、鵜が魚を飲み込んで消化せず吐き出すように、人の言動の当否を考えもせず、ただ信じ込んで盲進することです。

投票権が18歳に引き下げられます。やがて、高校では新教科として「公共」が始まるようです。今後の社会を担うのは皆さんです。皆さんの中には今後の社会を引っ張っていく人が出てくると思います。曇ってない眼でしっかり物事を見つめ自分の利益だけでなく社会全体の利益も考え抜き、より良い社会を作っていくことが、皆さんのノブレス・オブリージュだと、私は思います。そのためにも、批判的に物事を見る力をつけて下さい。本校の授業では、批判的に物事を見る力をつけるようになっていきます。

そして、なにより大切なことは、何事も一生懸命することです。このことは、1年生にも、2年生にも、3年生にも入学式の時にお願い致しました。試験,大変ですが、一生懸命に取り組むことが大切です。何事も一生懸命することは、「恵まれた人間が自覚すべき義務」、皆さんのノブレス・オブリージュだと思います。